

## ベロ出しトニー

しばふりょうたろう  
芝不良太郎

●受賞のことは  
2年連続入賞させていただき誠にありがとうございます。文中にある馬のベロ出しは馬が勝手にやっつてるのはたまにあります。人の合図でここまで完璧にベロを出すのは長い厩務員生活でトニービン(写真)以外見たことがありません。この物語はかつての担当馬とともに今まで一番の思い出です。昨年と同じになりますが、登場する人物や馬達に心より感謝いたします。

●プロフィール  
栗東トレーニングセンター、梅田厩舎所属の現役厩務員。「芝不良太郎」は大ファンである司馬遼太郎先生を競馬風にアレンジしたもので、20年前から色々なサイトのコラムなどで使用してきた愛着あるペンネーム。モットーは「おもしろおかしく」。

生きていく間に自分の財産や趣味の物などを分配したり処分したりする「生前整理」。人生も終盤に差し掛かってきた僕もそろそろと思いつつ放置したままだったが、昨年腰の手術をしてしばらく自宅療養をする事になったので、財産など無いが暇潰しに少しやってみることにした。

趣味系やグッズとかが入っている押し入れの中を探してみると、ほとんどが自分にしか意味のない物の山。その中でも捨てるか残すか困るのが写真だ。

最近撮った画像はスマホやパソコンに保存してプリントアウトする事がほとんど無くなったが、昔の紙の写真は衣装ケースの中に大量に眠っていた。

栗東トレーニングセンターで厩務員生活三十数年を過ごしてきた僕の写真のライブラリーのほとんどが馬。

自分で撮ったものや友人やファンの方にいただいた膨大な量の馬の写真を「保存」と「抹消」に分けていく。

を撫でました。すると舌がちよつとずつ出てきて十センチくらいで止まった。撫でるのを止めるとしばらくそのまま、その後ゆっくりと舌が引こんでいく。撫でるとまた出る。ずっと撫でているとずっと出したまま、軽く歯で噛んでいるから薄い紫色に変わってきて舌は完全に乾いてしまっている。

何じゃ面白すぎるこの芸は……

まるで機械仕掛けのおもちやみたい人に人が自由自在に舌を出し入れさせている。

「何でこんな事できるようになったんですか？」と聞いてみた。

「はつきりした事はわからないんですが、イタリアでの現役時代の厩舎の担当の方がおやつに角砂糖を食べさせていて、元々舌を出す癖のあったトニービンに毎日のように角砂糖を舌にのせながらおでこを撫でて遊んでたようです。すると、撫でるだけで舌を出すようになったみたいです。まあ動物に芸を餌で仕込むやり方ですね」

うーん、これだけの名馬にこんな芸を教え込むイタリアの厩務員さん恐るべし！

驚きと楽しさと感動でしばらくトニービンの前から動けなくなった僕は「いつかこんな人を笑顔にする芸を馬に教え込もう」と胸に誓った。

それから夏に札幌出張がある度に迷惑と知りつつ社台SSさんに行かせていただいたが、絶大な人気だったサンデーサイレンスはサラッと見て、目指すは単推しになったトニービン。

連れて行ったトシキも彼の大ファンになってしまったが、写真に写っているトシキもトニービンももうこの世にいない。きつと天国でおでこを撫でて舌を出させていることだろう。

担当していた馬の写真が中心で、誰もが知っている名馬や自分でも名前を思い出せない馬など1枚1枚見ていくと、いつの間にか作業の事を忘れて完全に観賞会になってしまっていた。

そしてある写真を見つけて完全に手が止まった。写真には厩舎の裏戸から顔を出す1頭の馬とその両側に僕と一人の少年が写っている。

少年の名は「トシキ」。

札幌の友人の親戚だった彼はこの写真の当時中学生。馬が大好きで僕が出張で札幌競馬場へ行くと厩舎へ遊びに来たり、僕らが牧場巡りに行くと必ずついてきた。

「将来、競馬の厩舎で働きたい！」といつも言っていたトシキは、二十代半ばの若さでこの世を去った。交通事故だった。

写真の中のトシキを見ていると自然と涙が溢れてきて、一緒に写っている馬を見ると思わず笑顔になる。

真面目な顔で舌をペロロンと出しているその馬は1988年の凱旋門賞馬トニービン。日本で繋養され1

仕分けしている写真の時代はそのトニービンの産駒であるエアグルーヴへ。

彼女を担当できたのは偶然と運でしかないのだが、父親の血を受け継いだのは能力だけでなくその舌芸もだった。

グルーヴは新人厩の頃からその長い舌であっちこっちを舐めてきた。そのうち人參が欲しいが為に媚びを売って顔を舐めてきて、僕のポケットから人參が出てくるのを知ってポケットに手を入れてだけで顔を高速でペロペロ舐めてくるようになったのだ。

父の芸に比べたら難度は低い、彼女の舐め芸も可愛くてなかなか好評だった。

グルーヴの写真は一番多く、僕が顔を舐められているものもある。やっぱり捨てられへんなあ。

写真はトニービンから三代目、グルーヴの生んだ仔イントウザグルーヴやサムライハートになっていく。

超良血のこんな馬たちを担当できたのは伊藤先生とグルーヴのおかげで、感謝してもしきれない。

サムライハートは来た時からうまやの中で落ち着いている時、舌をペロロンと出して止めるトニービンのような癖を持っていた。

「これはもしかしていけるかも？」そう思った僕は毎日ペロを出している時に人參をあげるから始め、そして声をかけながら人差し指を唇に当てていた。

そしてついにその日がやってきた！

人差し指をサムライの唇へ向かって「ハッ」と声をかけながら振りかざしたら、舌をペロロンと出して止めた。もちろん人參無しで、だ。

ついにやった！ 名前も顔も知らないイタリアの厩務員さんの背中がようやく見えた気がした。

994年にリーディングサイヤーになるなど種牡馬として大活躍した。

1990年前後、初めて訪れた社台スタリオンステーション(以後社台SS)。

当時の師匠であった伊藤雄二先生の名声を利用して見学させていただいたとはいえず、僕らみたいな馬を買う事もない下っ端の一厩務員に社台SSの方は説明付きで案内して下さった。申し訳ない気持ちでいっぱいになったが、一般見学では入れない所まで行けた事にファン出身の僕はずっと夢心地だった事を覚えている。その時初めて出会ったトニービンは放牧地で走り回る猛々しい馬という印象しかなかったが、それから12年後だっただろうか、再び厩舎のメンバーと社台SSへ見学に行った時の事。

天候の理由で放牧地ではなく厩舎の中にいた種牡馬たち。

厩舎内にいた方がトニービンに近寄り、僕たちに「ちよつと見てください」と言っておデコから鼻筋あたり

よく分かん感動が胸を襲い涙が止まらなくなった。「後は、僕以外の誰がやってもこの芸をするかどうかやな……」

サムライハートは故障がちで長期休養に入り、伊藤厩舎の晩年、諸々の事情で転厩する事になった。

僕は担当馬に関してはオーナーから委託された馬を調教師から更に預かっていると思っっているので悲しい気持ちはなく、「こんな素晴らしい馬を担当させてもらってありがたいと思いました」と思うだけ。でも唯一心残りだったのがあの未完成の芸。

「今でも人參欲しくて他の人にも舌を出してアピールしてるかなあ、こそつと厩舎に忍びこんで確認したいな」とか思っていた。

そんなある日、僕の厩舎にデビューして間もない藤岡佑介騎手がやってきた。彼はエアグルーヴの大ファンで子供の頃から知っている仲だったし、サムライがいる厩舎に入入りしているのを知っていたので、あるお願いをしてみた。「佑介、悪いけどサムライに会うたら人差し指を唇に向かってハッ」と言いながら振りかざしてみて」と頼んだら、その芸を見た事がある佑介は快諾。

後日、佑介が嬉しそうにやってきて「やりましたよ、指さしただけで舌を出しました！」。

ここに祖父から受け継いだベロ出し芸は完成した。目頭が熱くなりながら僕は心の中でつぶやいた。

「イタリアの厩務員さん、あなたのトニービンに仕込んだ芸が孫に伝わりましたよー」

そんな昔の事に思いを馳せながらの写真整理。この日はほとんど進まなかったのは言うまでもない。

